ひとを〈嫌う〉ということ 中島義道

中島義道という哲学者をご存知でしょうか。詳しくは著者紹介の欄を見てもらえばわかることなのですが、一言でいうなら“生きるのに苦労している人間”でしょうか。これは決して悪い意味ではありません。私たちが当たり前として受け取っていることに彼は疑問を持ちます。そして考え抜いています。本書もその一つで、“人を嫌う”ということについて考えられた本です。

突然ですが、もし自分より容姿が優れ学力もある人間がいたらどう思うでしょう。おそらく多くの人が妬みといった感情を抱くでしょう。本書ではこういった“日常的な嫌い”について述べられています。著者は日本がこういった“嫌い”を徹底的に排する傾向にあると述べています。妬む自分に嫌悪感を抱いたことがある人もいると思います。これはこの傾向の産物といえます。

著者の結論は“嫌いという感情は好きという感情と同じくらい自然”です。ただ日本の“嫌い”を排する傾向が、日本人が嫌うことの下手である理由であると述べています。たとえば、ある人を一度嫌いだと思うとたちまち、その人の行動・言動すべてが嫌になるという経験はないでしょうか。著者はこういった極端な“嫌い”をしないで、もっと自分の感情を冷静に受け止めることを主張しています。私と彼はこういうところが合わないんだなあ、なるほど、みたいな感じです。そうすることで、自分が嫌われることにも寛大になることができ、自分の人生が豊かになると述べられています。

また本書では“嫌い”の原因などが分析されています。これも自分の感情を冷静に分析するのに役立つことでしょう。

私の拙い文章では著者の考えを伝えきることはできませんが、この本を読むことによって“嫌い”という感情に対する見方が変わると思います。それを“さみしい”と受け取るのも人それぞれです。ただ物事の見方は一つじゃないなあ、と思っていただければ幸いです。もしよろしければ、この作者の別の本も読んでみてください。それでは失礼します。